

宮沢賢治「農民芸術」と小谷純一「愛農運動」 ——ユニバーサル・プロジェクション (U・P)の視点から——

矢 谷 慈 國

Comparative Study on Kennji Miyazawa's “Farmer's Art” and Jyunichi Otani's “Ainou Movement” From the View Point of “Universal Projection (U.P)”

Yoshikuni YATANI

要約

公益社団法人全国愛農会は2016年3月に創立70周年を迎え、会をあげて記念すべき周年を祝い、その長きにわたる歩みを総括し、二十一世紀の地球世界に向けて新しい時代にふさわしい活動を「愛農運動」として構築していくべき画期に直面している。この時当って昭和21(1946)年に平和と愛と協同の村づくりをめざす「愛農運動」を開始し展開してきた創設者小谷純一(1910年～2004年)の思想と、戦前において同じく理想農村の構想を大正15(1926)年「農民芸術概論綱要」という形で提示した宮沢賢治(1896-1933)の思想を対比し、その類似と差異を私独自のユニバーサル・プロジェクションの視点から考察することが本稿の目的である。

叙述の順序は以下の通りである。第1章において、筆者が2003年(59歳時)に愛農会の会員となり、「愛農運動」に積極的に関わるようになるまでには、それを準備したと思われる「農と食と自然」という生きて行くのに最も基本的な問題に私なりに取り組んできた前史があった。これらの前史があったからこそ、私は愛農会の理念と実践により深く関わることになったのだと思う。まず私的前史を記述する。

第2章においては、愛農会の理想農村建設の構想である「愛農運動」の提唱と、それより早い戦前の段階で大正15(1926)年に書かれた宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」の提起する「第四次元の農民芸術」の構想を体系的に比較検討する。その際両者をつなぐキーワードとして、筆者独自のユニバーサル・プロジェクション(U・Pと略記)の概念が有効な媒介者となる。「U・P」とは、人間と自然、個人と社会、精神と身体を実

体論的に二元分割して前者が後者をコントロールすべきであるという西欧近代社会の基本的枠組とは正反対の、両者の関係を一体連続で不可欠に結びつき関わりあっている「関係的存在」であり常に相互に変化し続ける「現象」同志であると考えたり、取り扱ったりする仕方のことである。

第3章においては、賢治が「農民芸術概論綱要」を提示するに至った戦前の日本の農村と農民の暮し、社会の変動、軍国主義化、日中戦争から太平洋戦争に至る戦前の日本社会の歩み、空襲と原爆によって終息し、焼跡、闇市、食糧欠乏から始まった敗戦後日本の70年の「平和」と「経済成長とその衰退」の長い変化の中での、農業と食べものとの環境への取り組みと社会の変化を概観し、それぞれの変化の中で、宮沢賢治の「農民芸術」と小谷純一の「愛農運動」がどのように位置づけうるかをふりかえる。

第四章において、賢治の構想との対比を経て、21世紀の愛農運動は何をめざし何を為すべきかについての筆者なりの提言を行って、本稿を終えたい。

キーワード：「農民芸術」、「愛農運動」、「戦前20年、戦後70年の日本と農業」、「U・P」

第一章

「愛農会」と出会うまでの前史

筆者と愛農会の出会に至るまでにはそれを準備する前史があった。筆者が農民の自立をめざした運動に関心を持ったのは、1979年6月～80年3月の1年間追手門学院大学から派遣されて、西ドイツ（当時）のビーレフェルト大学へ外地留学をして、秋学期が始まる前の7月・8月の2ヶ月間、語学研修をゲッチンゲンのゲーテ協会で行った時に逆のぼる。当時私は35歳であったが、そこで日本のいろんな立場からドイツ留学をしたユニークな日本人たちと出会い、2ヶ月間をエッセンゲマインシャフト（毎日一緒に料理する食い物共同体）のつきあいをして、お互いを目利きしあい友達となった。その時、山口大学農学部から留学で来ていた丸本卓哉氏（土壌学）に出会い、自分たち山口大の教員と市民の有志が「アジア農村の人的資源を開発する会（ジャドラ）」という東南アジア数カ国の市民が集う国際的NGOを1974年以来立ちあげ、あらゆる側面で発達の遅れているアジア農村を自前で開発していく人材を育成する国際活動を行っている。しかし我々のグループは農学や土壌学などの理科系のメンバーばかりで、社会科学の専門の人材がないので、社会学の研究者である矢谷さんにぜひメンバーになって協力してもらいたい」という要請を受けた。

私は大阪で生まれ育ったが両親が共に農村の出身で、子供の時から父の故郷の京都府北桑田郡周山町の山村に乳幼児期は疎開して過ごし、大阪に住むようになってからもしばしば里帰りをし

たり、夏休みを田舎で過ごしたという素地があった。また大学院修士課程では指導教授が農村社会学の余田博通先生だったので、修士の2年間は先生の運転する軽自動車ですばしば丹波但馬地方の農村を訪れ、聞き取り調査を行っていたこともあり、自分の本来の現象学的社会学の理論的研究とは異なった分野であったが、日本の農村の社会構造について、専門的な関心を持つに至った。

たまたまドイツで出会った丸本氏からの要請をうけて、帰国した1981年からジャドラの会員となり、山口市での会合やフィリピンでのセンドラ (Center for the Development of Human Resources in Rural Asia) の会議に参加するようになった。それは1974年、タイ、スワンガニバスで東南アジア11カ国から130名の市民が集って行われた「アジア農村の人的資源を開発するワークショップ (Workshop for the Development of Human Resources in Rural Asia) のフォローアップ組織、センドラ (Center for the Development of Human Resources in Rural Asia) として結成された国際的NGOで、Dr. Ledesma夫妻を事務局長としフィリピンのマニラに事務局が置かれ、農村開発や人材育成に関わる国際的ワークショップやスタディツアーが毎年積み重ねられていた。山口市を中心とするジャドラはこれに参加した日本からの参加者たちによって山口市で1974年創立されたのである。

1980年から私は、関西の研究者や友人、有志を集めて、「ジャドラ関西」を立ち上げた。「アジア農村の開発や人材育成に日本の市民として何をすべきか、何をしてはいけないか」というテーマをめぐって年数回、アジア農村での活動経験をもついろんな専門家を講師に招いて勉強会を始めた。

このようなアジア農村の開発をめぐるNGOの活動に関わる中から、1987年4月から88年3月までの1年間、国際的NGOとしてユニークな持続可能な有機農法を中心とした農村リーダー育成の研修を行っている「アジア学院 (ARI)」に内地留学をすることになった。私はアジア学院の活動現場に参与観察の調査者として一年間滞在しその活動のあらゆる側面に直接参加しつつ調査研究を行ったのである。その一連の調査報告は拙著「生活世界と多元的リアリティ^(注1)」に行っている。

このARI滞在中、講演会で来院された福岡正信氏の「自然農法」の理論と実践^(注2)に感銘をうけて、1988年4月、大学に帰任してから、大学の空地で会計課の了承を得て自然農法の実験を始めた。

当初は私とボランティアの学生たちのプライベートな活動であったこの畑作りは、1993年からは、専門科目の単位認定を行う正規の実習科目 (社会学フィールドワーク) として制度化され、近辺の農家から水田 (ニアール) 畑 (七アール) を借用して米作りと畑作りを行う形に充実された。

その間、ジャドラ独自の活動としては、1989年8月15日から31日の間、インドネシアドラの協力を得て、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、日本のドラの若手スタッフを招待し

て、スマトラ島山地、ジャワ島農村のスタディツアーを行った。この時に参加してくれた若手スタッフたちは後には各国のドラを代表する活動家に育っていった。

ジャドラの代表は1985年から2010年まで矢谷が務めていたが、矢谷の追手門学院大学退職を期に、神戸大学経済学部の藤岡秀英教授に引きついでもらうことができた。氏は神戸大の学生たちをつれ一週間～十日程のフィリピン・ヴェトナム等のアジアドラのパートナーを訪問するスタディツアーを実施している。

前史が長々と続いて私と愛農会の出会いには仲々至っていないのだが、私が初めて「愛農会」を知ったのは、1978年2月20日から3月6日、アジア学院主催の卒業生の活動現場を現地に訪問するフィリピンツアーで、同じツアーの参加者であった、愛農会の初期からの熱心な会員である有機農家・養鶏家村上周平氏と出会ったことからであった。彼は口八丁、手八丁のしたたかな、しかし信念を持った有機農業者で、産直の形で消費者に卵と野菜を提供していた。いっしょにフィリピンの市場を訪ねると並んでいる米や野菜や果物の値段や農業労働者の日当などを英語のできる私をよびつけて通訳させながら刻明にノートに記録して、日本の農村とフィリピンの農村の現状を推しはかり、ここはまだ日本の1965年以前の経済状態だといった見解を述べてくれた。私にはそのことは物質的基盤から現地の状況を知るやり方の模範となった。また現地の農民団体との交流会では、大きな声と動作で「愛農音頭」を見事に歌い、踊っていた。彼に、産直で消費者に売る農産物の値段は、だれがどのように決めるのですかと聞くと、「自分の農場を一年間運営するのに必要な費用を電気水道ガスから税金、車の維持費、子供の教育費、生活費などをぜんぶ書き出して、それを一年分の卵や野菜の生産物に割り当てて、「オラが決めるんだ」「それを納得してくれた人だけがオラの消費者となるんだ」ということであった。私は自作の有機農産物の値段の決め方として最も合理的な方法だと感心した。

この出会いで、ユニークな周平氏の人柄と共に氏の所属しているという「愛農会」が本気で有機農業に取り組んでいる農民団体として印象に残った。

村上氏は戦前は土地を持たない小作農であったが、戦後農地改革のおかげで自分の土地を持つ自作農となり、大変意欲的に戦後すぐの食糧増産のかけ声に応じて農林省や農協の進める化学肥料や農薬を多投して収量を上げる近代農法に取り組んだ。当時愛農会もその方向で農民の技術指導に効果を上げていた。しかし農薬を使用していた村上氏夫妻はともにその影響で病気になり農薬の害を身をもって体験した。昭和45（1990）年、愛農会は梁瀬義亮医師と会うことによってその害を知り、一切農薬を使うことを止め、有機農業に切り替えた。村上氏もそれに従った。当初、農薬と化学肥料を多投していた土でいきなり有機農業を行っても、作物は思うように育たなかったが、無農薬の土でできた野菜を夫婦で食べているうちに健康を回復できて、有機による土作りをしっかりとした上で作物を作ると体によい作物が育つことを確信するに至った。それ以来ゆるぐことなく有機農業を堅持してやっているという話だった。この村上氏の経験談も、私に有機農業への関心を深めたものだった。

大学での私の教育活動は、通常の教室での講義やゼミの外に、電気ガス水道のない山の中で生の自然と直接ふれあう経験をさせる夏休み中3泊4日で行う「分尾キャンプ」、田と畑を実際に作る中から学ぶ「社会学フィールドワーク」の授業、及び、春の「野菜を食う会」、秋の「芋煮会」の飲食を共にする自由討論の場づくりの行事の形で2010年3月退職までの39年間にわたって続けられてきた。これらの教育活動とジャドラの活動やアジア学院での内地留学は密接に関わりあっている。

アジアドラでは2000年から数回の「農民相互訪問プロジェクト (Farmer Exchange Visit)」を行い、アジアのメンバードラ各国の農民団体が相互に訪問しあい、現地で交流をもつ経験を重ねる中から、国際的なアジア農民組合 (AFA) の設立をめざしていた。2004年に国際的な農民が主体となる組合「アジア農民組合 (AFA)」を立ち上げ、エスターが事務局長としてマニラのアジアドラの同じ建物に事務所を置いた。

AFAを立ち上げる準備段階の農民交流行事はその間数回行われ、2001年8月24日～9月3日には私がアジア学院と協力して日本でその交流行事の受け容れをした。その準備段階から私は、AFAのメンバーとなるべき日本の農民団体をさがして推薦してくれという要請を受けていた。私はふさわしい日本の有機農業の団体を探していたが、私も当時メンバーだった日本有機農業研究会は、一匹狼の集まりのような感じがしてAFAのメンバーにはふさわしいと思えなかった。

たまたま2003年8月23日～26日に台湾で農民交流会が行われた時に、日本で有機農業をやっている農家を招待したいというAFAからの要請でARI (アジア学院) の三浦氏に相談すると熊本の有機農家の高丸和彦氏がよいだろうと推薦してきた。台湾の会合で高丸氏に、AFAは日本の有機農業の団体をメンバーに加えたいと考えているが、私は適当な団体を思いつかないのだからと、相談すると、自分が会員である「愛農会」こそふさわしいと思うという返事だった。村上周平氏から愛農会のことを聞いていたのにAFAから問い合わせを受けた時に愛農会のことを思い出さなかったのであるが、台湾で高丸氏に出合って、強く愛農会こそAFAの日本側メンバーにふさわしいと思うようになった。これが本格的な私の愛農会との出会いである。

2003年9月17日に、三重県青山町にある愛農高校に息子を進学させていた高丸氏が学校行事で熊本から三重に来たついでに、愛農会の理事である奥田美和子氏、田辺聖氏をともなって三人で追手門学院大学の矢谷研究室を訪ねて、AFAの活動の内容やその背景について聞きに来て下さった。

その訪問を受けて私が、後に愛農会職員となる私のゼミの卒業生坪井涼子さんと農業に関心があるといっていた追大の事務職員長井浩子さんをつれて初めて青山町別府の愛農会本部を訪問したのは同年10月5日のことであった。この日から私と愛農会の本格的な関わりがスタートした。私はすぐに会員登録をし、愛農会の歴史や創設者小谷純一氏のことを学び始めた。アジアドラのメンバーとしての私の希望は愛農会がAFAの正規メンバー団体となってくれることであり、奥田美和子理事や田辺聖理事と協力して会の理事会でその決定が行われるよう努力した。

その一環としてAFAが再び日本での農民交流を行いたいと私に要請してきた時、私は迷うことなく愛農会にその受け容れをお願いした。その時AFAが設定した「先進的な有機農産物の流通の仕組みを日本の事例から学ぶ」というテーマにふさわしい「名古屋の愛農流通センター」や青山町の愛農会員による「産直の活動」を訪問するプログラムを作ってもらった。この「農民交流（FEV）」の実施は、愛農会の側にもAFAの正規メンバーとなってもよいという感触を与えることとなった。

2004年2月11日～18日インドネシアで開催されたAFAの総会に愛農会理事の奥田美和子氏、通訳として坪井涼子さんが参加し、AFAの実態を確認した。それを受けて次の理事会で愛農会がAFAのメンバーになることが正式に決定された。私は二年余りの努力によって、AFAと愛農会を結びつけることに成功したのである。このことを受けて、私はすでに理事になっていた愛農会の国際部長という仕事を与えられることになり、現在に至っている。

第二章 宮沢賢治の「第四次元の農民芸術」と小谷純一の「愛農運動」の類似と差異

—U.Pの観点から—

私が「理想農村」や「理想社会」、「ユートピア（理想郷）」の考え方に社会的に関心を強く持ち続けてきた理由は、人類がこわしたり作ったりの長い歴史の中で千年持続するような真の理想社会を作りあげたことが一度もないという事実からである。数多く知られている、コンミュン（共同体）やそれに類する諸団体や運動体を調査してみた。そこではどんなに理想的な社会のしくみを工夫してそれを一時的に実現し得たように見えても、年月が経てば必ず何らかの不都合が生じて、不平等や差別、偏務的な支配関係や憎悪、敵対対立そして最終的には殺人や戦争に至る悲劇がくりかえされてきた。それはこれ程科学的な知識が発達し、宇宙の始まりや原爆、原発を作り出したり、生命の遺伝子にまで人知が関渉するまでになっているのになぜ人類は個人レベルでの殺人や国や民族レベルでの大量虐殺、あらゆるレベルでの自然破壊を止めることができないのか、人間中心に発達してきた、近代科学や近代的な知の体系は根本的な欠陥を内蔵しているのではないか、という疑問を持たざるを得ないからである。要するに人類はその歴史の中で「真の千年以上持続する理想社会（ユートピア）」を実現できたことは一度もないのである。

全国愛農会は2016年3月に創立70周年を記念するに当たって「千年持続する村づくり～それでも私たちは種をまく～」というテーマを掲げて記念行事を計画し、新たな70年に向けて展望を作ろうとしている。

この時にあたって、私は長年関心をもち続けてきた宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」に提示された「農民芸行」の構想と小谷純一が創立した愛農会が主張し続けてきた「愛農運動」の理念を系統的に対比し考察を加えることによって、今後の愛農運動の活動に私なりの寄与と議論の論点を提示したいと思い、この論文を書くことにした。

宮沢賢治の「四次元の農民芸術」の理念と小谷純一の「愛農運動」の構想を対比するに当たって、まずその類似と差異を列挙しておきたい。

一、二人の作品はまず「理想農村」の実現をめざす、二人の深い宗教的信念にもとづいた構想である。

賢治の場合では、それは法華經の教えに基づく大乘仏教の菩薩道、慈悲の実践と時間空間の相対性を主張したアインシュタインの物理学を総合しようとした、新しい第四次元の世界においては人間と自然（宇宙）、個人と共同体、社会、個々人の精神と身体が調和した慈悲（愛）の関係となることを理想とする立場である。小谷の場合では、原罪というくびきの元にある人類を救済するため、愛する独り子キリストを人間の世界につかわし、愛の教説を与え、人類の罪のつぐないのための犠牲の子羊としてキリストを十字架につけ殺し、かつ復活させることによって神の絶対的な愛と永遠の生命のあり方を教示された絶対的の神への信仰とその神の愛への応答としての生き方を選択していくという信仰の立場である。

これら二人の宗教的信念は、依拠する仏教とキリスト教の差異や二人が属した時代や文化のちがいを乗り越えて、共通のユニバーサル・プロジェクション（U.P）の特性の賢治的表現と小谷的表現として、同じカテゴリーに属する精神性のあり方（Spirituality）と位置づけ得る。二人の立場は共に「人間と自然（宇宙・絶対神）、人間個々人とその集団や社会、その関係の中に生きる個人の精神と身体」がほんらい一体連続で相互に密接に関わりあっており、より高い立場からはそれらは、二元法的に分割して別々の実体として取り扱うべきではなく一体同根、連続のものとして感受し取り扱われるべきであり、それらの関係は愛や慈悲の関わりにあるべきものであるという同じユニバーサル・プロジェクションの特性を有しているのである。

二、生没年、階層、学歴、職歴の類似と差異

宮沢賢治の経歴

賢治は明治29（1896）年岩手県花巻町の質屋古着屋を営む富裕な商人の長男として出生し、地元の小学校、旧制盛岡中学校、盛岡高等農林学校及び大学院で農学、土壌学を学び当時の最高の科学的知識を習得し、西欧音楽のレコードや浮世絵の版画を蒐集したり、セロを弾いたりする文化人としての自己形成を行った。家の宗教は浄土真宗であり父政次郎は盛岡仏教夏期講習会を催し東京から島地大等を招くなど熱心な信者であると共に家業にも力を尽くし宮沢一族（宮沢マキ）の中でも有力な商人としての力量を示す厳父であった。長男の賢治は当然家業を継ぎ家の宗教を守るべく期待され大事に養育されたが、しかし彼は質屋、古着屋という家業が貧しい農民達を搾取することになっている現実を受け容れられず、家業とその信仰の継承をめぐる父親と衝突し、

高等教育機関への進学を望んだり、家出をしたりの確執をくりかえしていた。父の譲歩と配慮により盛岡中学進学、さらに盛岡高等農林学校には首席で合格し、大正3年から7年同校卒業、その後研究生として大正9年(24才)で研究生を修了までが、学生時代であり、賢治は岩手登山や岩石採取、哲学書や宗教書の読書、参禅、同級生と同人誌「アザリア」に短歌や短編を発表するなどの充実した青年期を過ごした。

しかし彼の進路をめぐる父親との確執は続き、大正9年「法華経如来寿量品十六」を読んで身ぶるいする程の感動を覚えた賢治は同年秋、田中智学の主催する在家日蓮宗団体である「国柱会」の信行員の登録を行い、本部から本尊の御曼荼羅を授与され、忠実な日蓮宗信者となり父に改宗を迫り拒絶される等の葛藤が続いた。

大正10年(25才)1月に無断で上京、本郷に下宿して筆校や校正に従事しながら夜は国柱会の活動に奉仕するという生活を始めた。国柱会の指導者高知尾知耀の勧めにより、詩や童話の創作によって法華経の教えを伝える「法華文学」を志すに至り、1ヶ月に三千枚もの原稿を書くような爆発的な創作活動に従事した。

4月、賢治のことを心配して様子を見に上京してきた父と賢治は一時休戦状態となり二人して伊勢神宮、比叡山、奈良方面を旅行の後、8月中旬妹トシ病気の報で帰郷した。その年の12月稗貫郡立稗貫農学校(大正12年より県立花巻農学校となった)の教諭に就任した。これは郡長の葛博、校長の畠山栄一郎が入営して欠員となる教員補充のため賢治に就任を要請し、賢治の進路をめぐる対立していた父子にとっても受け入れやすい解決策となった。大正10年3月(30才)退職までの足かけ5年間で、賢治の生涯でもっとも安定した収入もあり、社会的にも家族に対しても安定した地位にあった時季である。この間、農学校では生徒たちに自作の劇やオペレッタを演じさせたり、野外授業や岩手登山に連れ出したり、校歌、応援歌を作ったり、賢治独自のユニークな教育を行った。賢治が担当した学科目は、化学、代数、英語、土壌、肥料、農業実習(稲作)であったが、教科を教えるやり方も独自の創意に充ちたものであり、その授業を見学に来た郡視学や他校の教師や同僚が感心するのみならず何よりも教えてもらう生徒たち自身が積極的に楽しんで取り組めるようなすぐれた授業であった。また賢治は生徒たちに「学校を出たら会社勤めなどせずに、極力畑にかえれ」と常に説いていたという。

その間賢治の創作活動も活発に行われ、大正13年4月に心象スケッチ『春と修羅』を12月にはイーハトーヴ童話『注文の多い料理店』各1000部を自費出版した。この2冊の賢治が生前に出した本は、ほとんど売れなかったが、同時代の詩人や作家や同人誌の佐藤惣之助、鈴木重吉、森佐一、草野心平、石川善助、辻潤等に認められ交流が始まり、同人誌への投稿の依頼等もあいつぐようになった。

賢治が何故すべて順調であると思われた「花巻農学校教諭を大正15・昭和元年(1926)30才の3月に依願退職し、下根子桜の宮沢家の別宅で独居自炊の生活に入り、付近を開墾耕作し、羅須地人協会を設立し、直接的な農民運動の活動にふみ込むに至ったかについては、以下のような伝

記作家等の指摘があるのだが私としてはもう一つ納得がいかない部分もある。

- 一、賢治を教諭に雇傭してくれた豪放らい落で賢治と相性のよかった畠山栄一郎校長が退職し、堅苦しく真面目一辺倒の中野新佐久氏が校長になったこと。
- 一、賢治自身が高橋武治にあてた退職直後の4月4日に書いた手紙に「私も農学校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに傲慢な態度になってしまったことを悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんご厚意に酬いたいとばかり考えます」と記している。しかしこのことの詳細ははっきりしない。
- 一、彼が最も早く農学校退職の意向を伝えたのは、前年大正14年6月27日斎藤貞一宛の手紙に「わたしも来春は教師をやめて本統の百姓になります」ということばが記されているのが初めとされている。同年10月25日の「告別」という詩に、教え子へのことばとして「一云わなかったが、おれは四月にはもう学校にはいないのだ。恐らく暗いけはしいみちをあるくだらう」と書いている。
- 一、また十二月一日、当時弘前歩兵第三連隊にいた弟清六には「すぐご返事するのですがこの頃畠山校長が転任して新しい校長が来たりわたくしも義理でやめなくてはならなくなったりいろいろごたごたがあったものですからつい（知らせるのが）遅くなったのです」と言っている。

このように賢治がなぜ「この四年間はわたくしにとってじつに愉快な明るいものでありました」といっている農学校を依願退職し、一切の制度的枠組から離脱して「羅須地人協会」という、農民生活改善の運動を全くの独力で開始するに至ったのかの理由づけとして充分説得的なものが見い出せない。

それらの中で農学校の第一回卒業生で賢治がその植樹造園等の仕事を行う就職を岩手温泉に世話した富手一の証言が最ももっともらしく思われる。「先生はわたしたちにいつもいってました。学校を出たら家へ帰って百姓をやれ。なんどもなんどもいわれたのです。ところが学校をでるとたいてい技手になったり役所へつとめてしまう。それでは農村は立ち直れない、よくならないと先生は思われていたのです。そういう自分が俸給生活者である矛盾から、おれも百姓になるからおまえもなってくれ、という強い態度を示されたのだと思います。学校内で校長とどうということとはなかったと思います」というものである。また元賢治と同僚であった白藤慈秀は『宮沢賢治の生活諸相』の中で賢治のことばとして、「現代の人びとは旧観念にとらわれて、農学校の卒業者の中から月給生活者が多数出れば、その学校の成績がよいように思っているのは大いなる誤りである。花巻農学校はこの迷妄を破って、農村愛郷土着の人材を養成するよう邁進しなければならぬと力説強調していた」と、教師の間でも賢治の訴えていたことをのべている。

以上の検討を総合してみると賢治の農学校退職の最大の理由は富手、白藤の証言のように、「生

徒に百姓になれと教えている自分自身が教師で給与生活者であり続けている矛盾」を、「自ら本統の百姓になることによって一貫したものにしなければならない」という誠に潔癖な、言ったことと為すことの一致を追求する賢治自身の妥協のない性癖によるものと言っているのではないかと思われる。

その賢治が、自らに課した仕事は「本来のプロの農民として農業活動によって農産物を効率的に生産し販売し十分な収入を確保して、結婚し子供も作って立派に農業によって生計を立てる」という方向には全く向いておらず、相変わらず「野の教師」の仕事、協会の建物の外部へは無料の稲作指導と肥料設計、この建物を中心としては農民講座（科学、土壌学、植物生理などの講義）レコード等の持寄競売、冬季製作品や種苗交換、農民芸術の講義と音楽合奏の実演等々であった。

農学校を退職して「羅須地人協会」の活動に踏み込んだことは賢治の人生における大きな決断であり転機であったが、この活動が理念とする新しい理想農村建設の構想を簡潔に力強く表現したものが「農民芸術概論綱要」という文章である。

賢治の羅須地人協会の活動は昭和3（1928）年8月天候不順の下で農村指導に奔走中発熱病臥するまでのわずか2年4ヶ月程で終り、昭和6（1931）年2月、東北砕石工場の技師に就職するまでの2年6ヶ月は病床にあって書きためた詩や短歌、童話の推敲を行った。

昭和6年2月東北砕石工場の技師となってからは「農地の土壌改善のため有効である」と賢治自身がその意義を認めた、石灰の宣伝販売のため、見本の入った重いトランクをさげて各地を巡回するが同年9月工場の要請により上京後直ちに発熱、月末に花巻へもどり以後死亡する昭和8（1933）年9月までの二年間は花巻の実家の病床にあった。病中にも農民の肥料相談に応じて指導したり、詩童話作品の各種同人誌等への発表、自作の推敲等をしてしたが、遂に9月20日容態急変、急性肺炎と診断されるが、夕刻、熱を押しして農民の肥料相談に応じた後、短歌「方十里稗貫のみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる」「病（いたつき）のゆゑにもくちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし」の辞世二首を墨書して、21日午前11時半突然「南無妙法蓮華經」の唱題を唱え、父に「国訳妙法蓮華經」千部を翻刻し友人知己に頒布することを遺言し午後1時半永眠した。

法名「真金院三不日賢善男子」享年37才。この年、米作は岩手県はじめての大豊作であった。

小谷純一の経歴^(注7)

小谷純一は明治43（1910）年和歌山市小豆島の地主農家の長男として出生、地元の旧制小中学校を経て、大正14（1925）年京都府立高等蚕糸学校入学、昭和3（1929）年同校卒、同年4月、京都帝国大学農学部入学、昭和6（1931）年大学卒であった（農業経済専攻）。和歌山の地主の長男としては当時最高の学歴を経過した。

小谷は求道的な動機から京都高等蚕糸学校一年生時から毎土・日曜日は御室の下宿から東山麓の、西田天香主催の「一灯園」に通いその活動に参加していたが、昭和4（1929）年3年の時（満

19才) 京大学生会館で佐藤定吉の伝道集会に参加して、「自分が今まで求めていた光がこのキリスト教の信仰の中にあることを直感した」。その後「京都イエスの僕会」、京大進学後には「京大イエスの僕会」に属して、日曜日は早朝から「早天祈祷会」で共に祈り、その後の聖書集会、学生たちによる鹿ヶ谷小学校の子供たちを相手の日曜学校、午後は伝道集会で求道者になった人たちへのお宅への訪問伝道をしたり、夜は町へ出て路傍説教をする等、丸一日いそがしく過ごした。^(注8)

小谷純一のキリスト教信仰の系譜は、内村鑑三が明治33(1900)年『聖書の研究』を創刊し、「無教会主義」を説いたことにたどる。内村は日露戦争に反対し非戦争を唱え、当局の弾圧を受けたが、その弟子である矢内原忠雄の弟子が小谷が強い影響を受けた佐藤定吉であり、佐藤は東京帝国大工学部卒、東北大教授を大正13(1924)年退職後、5女慈子の死により「全東洋を基督へ」の召命をうけ、昭和2(1927)年「イエスの僕会」の運動を開始し、全国的に高校生、大学生の間にリバイバル伝道を展開した。

このようないきさつで小谷は佐藤定吉の影響により無教会派のキリスト者となった。

小谷は京都帝大農学部卒業後、師の橋本伝左衛門の指示で加藤完治が茨城県内原で開始していた「満蒙開拓義勇軍」の活動に参加したが、キリスト者であった加藤が右翼主義的な「神ながらの道」へ変身したことを嫌ってそれから離れ、昭和9(1934)年農林省が農村の経済厚生運動の中堅の人物を養成するため全国12箇所を設置を計画した「農民道場」^(注9)の創設に参与した。

小谷は昭和9年34才で結婚、同年に夫婦とも肺結核で余命2ヶ月を宣告されたが、7年間の闘病生活の末玄米正食療法で起死回生し、健康をとりもどした。昭和15(1940)年大阪府立農学校教諭、昭和19(1944)年和歌山県立青年師範学校教授で終戦を迎えた。

この敗戦の経験を小谷は深刻にとらえ、戦前に「満蒙開拓義勇軍」の運動や国主導で推められた「満蒙開拓移民」等に協力したことを根本的に「自らの過ち」として反省した。「キリスト者でありながら愚かにもあの戦争が神の意志にそむく侵略戦争であることに気づかず賛同し協力した私の罪の悔い改めから愛農運動がスタートしたのであります^(注10)」。戦後の平和憲法に則る、平和主義と、愛と協同の理想農村を創り、キリスト教的隣人愛の具体的実践として、人間の生命を保つ食糧生産を行う農業を位置づけ、昭和20(1945)年12月16日故郷和歌山市小豆島の自宅と水田9反と畑5反の農地で、「愛農塾」を元教え子たち16名と開始した。これが全国愛農会の母体となり昭和21(1946)年3月17日、参加者70名で愛農会が創立された。

三、宮澤賢治の「農民芸術概論綱要」と小谷の「愛農運動」の理念の比較考察

戦後すぐに、戦争協力をしてしまった戦中の小谷自身の行動の深刻な反省と自己批判からスタートした愛農会は、戦後70年間の日本の戦後史の大きな社会変化の中で組織や会員数を拡大させたり激減させたりする消長をくりかえし2016年に70周年を迎えつつあるが、ここでは「愛農運動

の精神的バックボーンをはっきりと提示している小谷純一の2冊の著『愛農救国の書』（昭和25（1950）年刊）と『愛農救人類の書』（昭和27（1957）年刊）と愛農会綱領、等の基本的文書と、宮澤賢治の第四次元の「農民芸術」の構想を提示した「農民芸術概論綱要」を対比しつつ、両者の類似と差異を明らかにすることにより、両者のより立体的な理解をめざしたい。その際、両者をつなぐ共通の枠組として、筆者の考える、あらゆる宗教性や精神性の共通項として、ユニバーサル・プロジェクトの概念が参照される。

以下、まず賢治の農民芸術概論綱要の記述に対比する形で小谷純一の「愛農運動」論の特性を明示して行く。

序論 「おれたちは農民である。づるぶんいそがしく仕事もつらい」という書き出しで始まる農民芸術概論綱要が書かれた大正15・昭和元（1926）年とそれに続く時代は、昭和初年の農業恐慌と自然災害によって農村が大変窮乏した危機的時代であった。その中で賢治は「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致において、論じたい」と述べる。賢治自身が盛岡高等農林学校で当時の最新の科学を身につけた科学者であると同時に熱心な法華経の信仰者として、大乘仏教の菩薩道、慈悲の世界の実現をめざす宗教的人格でもあった。その理想を序論で「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と表現している。

小谷の場合は、戦前の帝大農学部卒（農業経済学専攻）という知的背景から、戦後の食糧難の時代にあって農業の改善と生産性を高める道として「最新の科学的知見」の持ち主に常に注目すると共に、農業の各々の項目についての深い経験と実績をもつ「篤農家」たちを愛農会の農業講習会の講師に招いて、実践的に実際やってみる形での実習をすすめた。と同時に小谷の精神的なバックボーンは無教会派のキリスト教信仰であり、「人間＝自分自身の原罪の自覚から出発し、その原罪を贖うために十字架上で一人子イエスを贖いの子羊として殺し復活させることによって愛と生命の道を示された神の絶対的愛への信仰と、その神の愛への応答としての隣人愛の実践＝人の生命を支える食べ物を作る営みとしての農業の実践」ということにあった。農業は小谷にとって、キリスト者として課せられた生き方である隣人愛の最も具体的な実践の業であり、その業を通して、個人の家族、村、社会、日本全体、地球上の人類全体の救済へ至ろうとする「愛農救国、救人類の道」であった。

この個人から人類宇宙へと拡大する愛の考えは、賢治が「自我の意識は個人から集団、社会、宇宙へと次第に進化する」と述べていることに対応する。

また小谷の書いたものの中には彼自身の「神の声が直接示される」経験「聖霊の導き」をうけたという経験が見られると共に、「キリストの十字架を信じ仰ぐ時、私の古い「エゴ」のかたまりであった罪のからだは完全にキリストとともに死んでしまうのである。使徒パウロは「わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのはもはやわたしではありません。キ

リストがわたしの内に生きておられるのです。」と言っている。「エゴにとらわれた私は完全に死にきって、いまを生きている私は「神の子」である。この自覚を得ることが信仰である。」^(注11)と述べている。

そこから「愛農会も愛農高校も人が建てたのではなく「神立」の組織である」^(注12)という主張がなされることになる。

賢治の法華経の信仰の中にはこのような「キリストの十字架による贖罪」という思想に対応するものは見つからない。しかし、「宇宙を包む透明な意志」や「強く正しく生きるとは銀河系を自らの中に意識しそれに応じていくことである」さらに「農民芸術とは宇宙感情の地人個性と通ずる具体的表現である」などの表現に、宇宙や銀河と関わせる形でキリスト教の絶対神に対応する究極的なものが表現されていると見ることができる。

賢治は**農民芸術の本質**の章で「かくしてわれらの芸術は新興文化の基礎である。」と述べているが、これに対応する小谷の言葉は「21世紀は愛農運動の本番」^(注13)である。それは20世紀の「世界の食糧危機、有毒化学物質の増大による食料と飲み水の質的危機、地球生態系の危機への対応としての有機農業への転換の必要、平和憲法を死守することによって世界平和に貢献する運動が、救人類、救地球の具体的な方策であるという理念」につながった主張といえる。

賢治は**農民芸術の諸分野**の章で、農民芸術は、伝統的に真善美という価値の区分の中の美の領域に関わる活動に限定されていた芸術の概念を人間の生活の全分野、従来宗教や科学や芸術や生産や生活の実践活動として区分されていたすべての活動を「農民芸術」という概念の中に包括し、最終的には「芸術のための芸術」「人生のための芸術」をこえて「芸術としての人生」というとらえ方に集約していく。

小谷の考える「愛農運動」の諸分野も、あらゆる人間に必要な食べ物を作る農業生産のすべて、その産物の加工によって生み出される食品の生産、その流通や販売、その料理と共飲共食による交わり、地産地消の提携と愛農高校における農業後継者の育成とその人格形成、農民の国際交流を通しての世界平和の構築など、拡大させていくと人間の必要な活動のほぼすべての分野をカバーするものとなる。愛農会の歌づくりや踊りづくりなどの活動が近年見られなくなったことは、その全体性をめざす本来の理念から逆行する残念な傾向であると思う。「二十一世紀の愛農運動」は「芸術的創造」にもその活動を抜げていくべきである。

農民芸術の諸主義の章で、賢治は「芸術のための芸術」を少年期、青年期に「人生のための芸術」を壮年期に、「芸術としての人生」を老年期に配当しているが、彼が最終的に目指していたのは「芸術としての人生」である。この「芸術としての人生」という境地に対応するものを小谷の思想の中に捜すとすれば、賢治の芸術が人間の全生活、全人生をカバーする広大なものであったことを考慮に入れば、小谷の場合、「神の子の自覚をもって、この地上に愛と幸福に満ちかがやく天国を実現すること」^(注14)それを自らの使命として生きることである。

農民芸術の製作の章で賢治は作品の製作プロセスについて述べるべき章に「世界に対する大な

る希願をまづ起せ、強く正しく生活せよ、苦難を避けず直進せよ」と、まず述べる。これに対応する小谷の表現は、愛農救国と愛農救人類救地球を訴える主張のいたる所に見られる。「真の愛は自分に反感をもち、自分を憎み、自分を殺そうとするものをも愛する愛でなければならない。……私たちがこのような愛の実践者になった時、はじめて地上に天国をつくりだすことができる。」^(注15)「人類最高の理想はこの地上に愛の天国を建設することである。この大理想の実現に私たちの一命を捧げつくした時に、私たちの生命は無上の幸福と歓喜に白熱するのである。それが困難な大事業であればあるほど、私たちは生きがいとやりがいを感ずるのである。」^(注16)

それは「何が起こっても失望しないこと」「愛農運動の理念を信じてゆらがぬこと」「世間の流行や動向にふりまわされぬこと」「運動がうまくいかぬ、はかばかしく進まぬことにひるんだり、幻滅したり、落ち込んだり、迷ったりして努力をあきらめたりせぬこと。やるべきことを正面から信念をもって取り組みやり続けることが苦難を避けず直進すること」なのである。

農民芸術の産者の章で賢治は「職業芸術家は一度亡びねばならない」という強烈な主張を行っている。それを言いかえると、農本的コミュニオンの中で農業を主としてやりながらパートタイムの芸術活動を行うその時々¹の芸術家ということになり、専門職業的な分業と市場競争原理によって価値評価が決められる芸術作品とその商品化の否定を行っていることになる。

愛農運動のにない手である農民達はその得意分野の差異によって、稲作、畑作、果樹、花、きのこを作ったり、酪農の諸分野に専門区分できるし、そのいくつかの複合経営も可能であろう。また農業以外の生業を組み合わせた、半農半Xのような生活形態も可能であろう。しかし小谷が生涯実践し続けた活動のあり方との関連で言えば、彼は愛農高校の校長や愛農会の代表や役員をしている時でも可能な限り自分の田畑での作物作りや農作業をやり続けており、それは、専業の教師であった戦前のあり方と、愛農運動を始め、生涯それを継続した戦後のあり方との好対照をなしている。愛農運動はどこまでも農の業の実践と離れては成り立たないのである。

愛農運動の理念的にない手としての農民は、第一義的に貨幣と交換される商品としての農産物の生産者ではない。隣人愛の具体的実践としての食べ物作りの産物が農産物であるとする、それは本来資本主義的市場で売買される商品と考えるべきではない。それはその人物をよく知っている〇〇さんが自分の農地で手塩にかけて作ってくれた、彼の隣人である私の生命を支える食べ物であり市場原理の貨幣で売買される交換価値でしかないものではなく、その交換は善意で作られた有用物やサービスどうしの交換である、使用価値の交換（贈り物の交換）であるべきである。この本来の使用価値の交換の原則が貫徹していさえすれば、円やドル等のワールドマネーに依存しなくても、ある一定の地域の中で生活している人々によって支持され、流通させられる「地域通貨」^(注17)で事足りるようになる。ワールドマネーの利潤追求を第一義とする非人間的かつ非道徳的ふるまいを、今後の国家や国民や地域住民がいかにコントロールできるかに、人類の未来はかかっているとと言える。愛農運動を原理的に小谷や賢治の原点にもどって考えるとそのような考察も可能となるのである。

農民芸術の批評の章で賢治は批評には、(1) 破壊的 (2) 創造的及び (3) 観賞的の3つがあり、それぞれ、(1) 産者を奮ひ起こたしめる、(2) 産者を暗示し指導する、(3) 完成された芸術に対して行われる、という差異を述べている。それでは「愛農運動」への評価や批評はどうあるべきか。私見によれば、(1) 農産物の評価、批評の基準は安全で健康によく、おいしい作物であることが基本で、同時に作るプロセスで自然破壊をもたらさない、持続可能な生産方法であるべきである。(2) 農業経営のあり方への評価としては、持続可能で生態系によいこと、人間の間に支配被支配の関係を持ちこまないあり方であること。(3) 生産物の流通や交換の公正なやり方(愛に基づく贈与のやりとり)になっていくべきこと。(4) 愛農運動そのものの組織運営の評価基準としては (Ⅰ) メンバーの平等な参加と意志表明が保障されていること (Ⅱ) 組織の意志決定プロセスが民主的であること。(Ⅲ) 情報公開と内外からの批判を受け止め応答していく措置を制度として確保していることなどがあげられよう。これは第3章で愛農会70年の歩みを概観する際により掘り下げて考察されるべきことである。

農民芸術の総合の章で賢治は「まずもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」と述べている。「かがやく宇宙の微塵」とは、ビッグバンの宇宙観ではすべての恒星や惑星が生成する材料となる超新星爆発によって生ずる宇宙の塵やガスのことである。この微塵が集まって銀河や太陽系が成立し、太陽系の第3惑星である地球上で単細胞の生き物から植物、動物を経て我々人類が進化してきたのである。その意味で我々人類の生命とその原点となる存在はこの「宇宙の微塵」なのである。賢治はわれわれにその原点である「かがやく宇宙の微塵となりて無方の空へちらばらう」とよびかけている。^(注18) それは固く古い人間のエゴを解体して無私の純粹な主体となることと、無方の空にちらばることによる宇宙と自分が一体化することを要請している。同時に「しかもわれらは各々感じ各別各異に生きている」宇宙に一個しか存在しない、かけがえのない個性をもったいのちであり、個性的な人格的主体でもあるのである。この宇宙や自然との一体連続と各別各異の個性を同時に生きる立場が賢治のいう四次感覚の立場であり、賢治的ユニバーサル・プロジェクションの表現である。

賢治の「芸術としての人生」を生きるあり方と平行させて、小谷の「愛農運動としての人生」「小谷のユニバーサル・プロジェクション」を生きるあり方を考えてみる事ができるというのが、私の立場であり、今回の書き物をした理由である。

最後に現時点での小谷及び愛農会の「愛農運動」の主張を列挙し、今までとは逆に、賢治の「第四次元の芸術」との共通性、接点を列挙して、この比較検討を終へたい。

現時点での「愛農運動」のメッセージと主張は『月刊愛農誌』の毎月の裏頁に最も簡潔に集約されている。^(注19)

『公益社団法人全国愛農会』の簡潔な説明文。「全国愛農会は1945年、敗戦の混乱と飢餓の中、

小谷純一によって起こされました。農業を愛し、農業に生きる仲間が、自主独立の運動として推進し全国に広がっています。個人の思想、信仰の自由を認めながら、愛農会の二つの祈り（世界平和の祈りと愛と協同の村づくりの祈り）と、愛農精神（神と人と土を愛する三愛精神）に共鳴する人々が集い、平和で明るい農村をそして社会を実現しようとたゆまぬ活動をつづけています。」

この紹介文の中に（1）愛農会が設立された由来、敗戦直後自主独立の仲間としての農民の運動としてスタートし、運動が現在にまで続いていること。

（2）小谷の無教会派のキリスト教信仰を出発点としているが、それは、個人の思想、信仰の自由を認める開かれたものであること。賢治は熱心な法華經の信仰者であったが、同時に「異なる宗教の人の行いであっても、その行いが無私で慈悲にもとづくものであったなら、それを見たとき涙が流れるだろう」と述べていて、偏狭な法華經主義から自由であった。

（3）世界平和の祈りと愛と協同の村づくりの祈り」という2つの祈りにもとづくこと。賢治の「第四次元の農民芸術＝理想農村」も同じ、平和の実現と愛と協同の村づくりへの願いを明記している。

（4）神を愛し人を愛し土を愛する三愛主義にもとづく運動であること。賢治の場合、「神」の位置に来る表現は「宇宙を含む透明な意志」「強く正しく生きるとは、銀河系を自らの中に意識しそれに応じていくことである」に示されている。本質の章で賢治は「農民芸術とは宇宙感情の他人個性と通ずる具体的なる表現である」と述べている。

次に「愛農会綱領」の五カ条を掲げて対比する。

一. われらは農こそ人間生活の根底たることを確信し、天地の化育に賛して、衣食住の生産に精進せん。

「農こそ人間生活の根底たることを確信」という思想は、商品流通を重んずる重商主義に対する重農主義＝農本主義の思想であり、小谷も賢治も本格的に農学を学んだ立場から当然依拠すべき考え方である。近代西欧の経済思想の歴史は、重農主義から重商主義へ、さらに産業資本主義から金融資本主義へと変化してきて、今日、全地球、全国民、民族を巻き込んでいる「グローバルマネー」の支配する経済に至っている。西欧の経済思想においては、重農主義は未だ十分に発達していなかった段階の近代社会と経済の状況に適合した、旧くさい後の動きによって克服されてしまった思想である。しかし、小谷も賢治も未来に達成すべき理想農村（社会）のあるべき姿は、「人類が生き残っていくために不可欠な食物を作り出す農業の営みを最重視するあり方である」と共に主張していることになる。

次に重要な主張として、愛農会の使命が「天地の化育に賛して、衣食住の生産に精進せん」と述べていることの意味を考えるべきである。

「天地の化育」とは、小谷の依拠したキリスト教の教えにも、賢治の依拠した法華経の中にも見出せない儒教の教典『中庸』の中に述べられている思想であり、当然戦前の高等教育を受けた賢治にとっても小谷にとっても、中国の古典である儒教の教えはこの世代の共通の教養の中にある慣れ親しんだ思想である。愛農会が、この重要なことばをちゃんと評価し生かしていくことは、70周年後の未来の活動にとって不可欠のことと考える。以下『中庸』の原文(自文)、訓み下し文、現代語訳をあげておく。^(注20)

「自文」「唯天下至誠 能尽其性 則能尽人之性 則能尽物之性 可以贊天地之化育 則可以與天地參矣」

「訓み下し文」「唯だ天下の至誠よくその性を尽すことを為す よくその性を尽せば 則ちよく人の性を尽くす よく人の性を尽せば 則ち以て天地の化育を賛すべし 以て天地の化育を賛すべければ 則ち以て天地と參すべし」

「現代語訳」「天下の至誠を体現した聖人はただその天命の性（万物の根源にある本質）を考察してそれを尽すものである 自分の性を尽すということは他者の性を尽すということでもある 他者の性を尽せば物の性を尽すということになる 物の性を尽せば天地万物を生成発育する働きを賛助・促進することができる」

この『中庸』のことばは、儒教の根本思想を表現することばであるが、私の観点からすると、人間と自然（宇宙）、人間（自分）と他者（集団・社会）、それぞれの人間の心（精神）と体（身体・物質）が本来、二元法的に実体として区分され、前者が後者をコントロールするのが当然であるという、西欧近代資本主義社会が作りあげている考え方と正反対の上記3つのペアの相互が本来一体連続であり、相互に入り組んだり影響しあっている、同じ一つの全体が、その時々にとる一時的な現象を表現したものに過ぎないと考える「ユニバーサル・プロジェクション（宇宙的一体感（観））の儒教的表現」として位置づけられる。

孔子のとなえた「儒教」の教義は、シャカのとなえた「仏教」の教義と同様、その中に、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教が自明として依拠する「絶対神」の概念を持っていない。その意味で、多神教的な背景をもつ「儒教」や「道教」「仏教」「ヒンズー教」「日本の神道」や未開社会の「アニミズム・トーテミズムなどの自然諸宗教」と「絶対的かつ決定的差異」がきわ立つことになる。

実はユダヤ教もキリスト教もイスラム教もそれらが共通に依拠する「旧約聖書」の世界では、もともと多数の神々が共存し競い合っていたのだが、「イスラエル民族」が自らの唯一崇教し折り捧げ物をそなえる神として、ヤハウエの神と契約を結んだ。神はそれに答えてイスラエルを導き約束の地カナンの地で繁栄させるというのが「旧約」といわれるものなのである。その結果として他の神々を偶像として拝むことを禁ずるようになった。唯一絶対神を奉ずる「一神教」の宗教的不寛容の根源はこの事情の中にある。

この「一神教」が強固な制度として形成された時に発揮される宗教的に不寛容なあらゆる行為

が人類史にもたらしてきた災害と罪悪は、計り知れず現在にまで続いて止まぬものである。

私は「新教のキリスト教徒」であるが、すべての宗教の最もよい部分の共通項を、ユニバーサル・プロジェクションの考え方、生き方として提示してきた。新約聖書の一番重要なメッセージは「汝の敵を愛し汝を迫害する者のために祈れ」であり「神は善い者の上にも悪い者の上にも太陽を照し雨を降らせて下さる」「福音はユダヤ人のためのみのものではなく異邦人のためのものでもある」などの教えの中にあらゆる宗教的不寛容を乗り越える主張をイエスの直接的な教えは厳然としてもっているというのが私の立場である。従って、仏教からも儒教や道教や神道やアニミズム・トーテミズムからも、それが私のとらえるユニバーサル・プロジェクションを核として含んでいる限り(現に含んでいる)私は学ぶことができるし、それを信じている他者とわかり合ったり、共に生きることができる。と考えているのである。

一、われらは、人生究極の目的は愛の実践にあることを確信し、愛農愛人の生活に徹せん

右にあげた諸宗教の究極的共通項、そのユニバーサル・プロジェクションの最重要ポイントは「私見によれば、人間と自然、人間と他者(社会)、心(精神)と体(物質)の間に、「愛」のかかわりをつくり出すことに尽きる」それを古代ギリシア哲学及びその影響をうけたキリスト教では「アガペー(神を愛する)愛」と「フィロス(知やその他の諸対象への愛)」「エロス(異性を愛する愛)」と区分して表現し、仏教では「慈悲」儒教では「仁」などとして表現していると私は考えて居る。当然小谷の「人生究極の目的は愛の実践にある」という愛農会の確信はキリスト信仰に由来するが、同時に彼が「天地の化育」という儒教のことも引用しているように、他の思想、他の信仰にも開かれている。愛農会は、キリスト教と聖書に基づいてその運動を行うと明示しているが、他宗教の信者の参加を排除していない。農業にまじめに本気で取り組んでいる農業者ならば、すべて「仲間」として迎えるという、他宗教への寛容と開けをとり続けてきている。その点、私が大きな影響を受けた「アジア学院」の他宗教に対する関わり方とも共通している。

一、われらは農の真使命を自覚し、愛農精神に充溢して、一切の労苦を歎びとせん。

愛農精神に充溢して愛農運動を行う人間は、一切の労苦を喜びとすることができる。これは深い宗教的信念に基づいて必要と思うことに正面から取り組む人間のあり方、ちゃんと腰が決まってゆるがない生き方を実践する者たちが共通して独白している境地である。賢治も同様のことを「詩人は苦難をも快樂とする」等と述べているし、パウロも「使徒行伝」の中で、「私が(私のエゴの思いで)生きるのではなく神が私の中におられ、私はその愛の神の意志を実行していく器にすぎない」。という生きざまを表白していることにも共通する。小谷も賢治もその境地に至る深い宗教的あり方を示しているのである。

一、われらは、農村の根本的改善は、青年の愛農教育にあることを確信し、身をもって範を示さん。

小谷と愛農会が日本で唯一で最小（一学年25名）の全寮制農業高校を昭和39（1964）年4月三重県青山町に校地11899坪（約4ha）を取得して知事認可の農業高校として開校したのは、この信念に基づく。それ以前から行われていた10日～2ヶ月にわたる愛農短期大学講座、同花嫁講座、夏期生活学校、今日まで続く愛農大学講座などの実施と共に「青年に愛農教育を与える」取り組みは、70年間にわたる愛農運動の中心的活動であった。

同様に、本人の病気と早い死によってはるかに短期の実施に終わったが、賢治の羅須地人協会の活動も「本物の主体的に自分で考え自分で行動し、灰色の労働を芸術によって豊かにしていく農業者を育成しようとする試み」であった。そして小谷も愛農会員たちも賢治も同人たちも「身をもって範を示す」生き方をしていたのである。

一、われらは、きょう固なる同志的団結を結び、愛と協同の理想農村建設に邁進し、もって新日本建設の礎石たらん。

すべての人間の作る人為的組織は、創設者の理想やそれに賛同し協力する初期の同志たちによって歴史上のある時点でその活動が開始され隆盛期を迎えるが、時間の経過と共に必ず変質してゆく。その変化の方向は、設定された理想の実現へと一貫して向う場合もあるが、理想の実現よりもすでにできあがった組織とそれに関わる人間を既存の状態で維持する方向に専ら向い、当初の理念の実現への努力が名目的なものとなり下ってしまうという組織の墮落現象へ向う場合が圧倒的に多い。「すべての組織は長い時間のうちに必ず変質し墮落する」というのが組織というもの社会学的法則であり運命である。原始キリスト教団、仏教団をはじめ、すべての官制、私制の多様な理念や目的を追求するために作り出された人間の組織は、必ず墮落するということに例外はない。私は社会学者として絶対墮落しないような組織が人類の歴史上存在した具体例は一例もないということを断言せざるを得ない。最近「縄文時代」が1万年にわたって持続できたことに気づきその理由を見直すことが21世紀の人類の未来を開く鍵となると思い、学習を始めている。

賢治の羅須地人協会はわずか2年余りしか存在しなかったし、愛農会はその創設者小谷純一の死後も70年間続いている。しかしそれが墮落しないで存続を続けるという保障などどこにもない。

その愛農会が70周年に当たって「千年続く村づくり」を標語として、新たな時代に取り組もうとしていることは、誠に勇氣ある宣言といわねばならない。この標語を決める話し合いの時、「百年持続可能な村づくり」という案が当時はやっていた他の例の類比から提案された。私は即座に

「百年ではアカン。我々が克服しようとして対決している「西欧近代社会とその農法」ですらすらで三百年続いていて、しかも未だワールドマナーという形で世界を支配している。矢谷は近代資本主義社会とその経済システムは、21世紀中に必ず滅亡すると信ずる。それは「有限な地球上で無限の人欲の追求を行うという論理的に永続しないシステム」であり、21世紀中に地球生態系の破壊と地下エネルギー資源の枯渇が進み、地球人口が100億を越え資源と食糧の不足が資本主義を持続不可能に陥らせるからである。だからせめてそれを超える「千年持続する村づくり」にすべきだと強調した。

人為的に作られた国家や組織が変質せず千年持続した事例を私は未だ発見することができない「古代ローマ帝国、ヨーロッパや中国やインドの王朝、徳川幕府、大日本帝国、アメリカ合衆国、ローマカトリック教会、仏教諸教団、グローバルな大企業などなど。」

従って、愛農会が70周年を期して次の時代に向って「千年続く村づくり」というテーマを掲げたことは、誠に「おそれを知らぬ、身の程を知らぬ僭上の沙汰」と言わねばならない。しかし、その提案をしてしまった私としては、その未知の解を、人間の存在自身を規定する「原罪」や「業（カルマ）」や「輪廻」の考え方や、それらから自由になる道を、2000年前に生きて示してことばに表現したキリストや仏陀、孔孟老荘や古代ギリシア、古代インドの宗教的哲学的カリスマたちの教説とその生きざまに、も一度戻ると共に、人間の原点から考え直し、1万年続いた縄文時代を見直し、生き直す努力を私なりに行わねばならないと覚悟している。

その際、私のこれまでの探求の中で有効な手がかりとなると思われる概念が、動物と人間の情報操作の差異を示す、サイン（記号）とシンボル（象徴）の理論（人間のみがもつ疎外構造の由来を示す）とカリスマたちが様々なし方で述べた「愛」の教説、私の「ユニバーサル・プロジェクションの考え方」などであることを明示して、本稿を終へたい。

次稿第3章では、賢治の生きた戦前と小谷が愛農運動を組織した戦後70年の、世界と日本社会の変化の中で、賢治の「農民芸術」と小谷の「愛農運動」と「日本の農業」がどのような歩みをしたかを概観する。第4章では、それらすべてをふまえて、愛農会の新しい「千年続く村づくり」という宣言をどのように具体化するべきかの私見を述べたい。

注

- (1) 矢谷慈國『生活世界と多元的リアリティ』関学生協出版会、1989
- (2) 福岡正信『わら一本の革命』春秋社、1983、『自然農法』時事通信社、1975
- (3) 宮澤賢治の事跡については、佐藤泰正編『宮澤賢治必携』「別冊国文学No6」學燈社、1980、堀尾青史『年譜宮澤賢治伝』中公文庫、1991、参照
- (4) 堀尾青史前掲書、291頁～299頁
- (5) 矢谷慈國『賢治とエンデ』近代文芸社、1997、第3章「宮澤賢治の農民芸術概論綱要」とユニバーサル・プロジェクションについて。「賢治の考えた理想農村・農民芸術概論綱要を読み解く」『月刊愛農』公益社団法人全国愛農会2013年6月号～2014年5月号。
- (6) 堀尾青史、前掲書452～454頁

- (7) 小谷純一 『愛農救国の書』昭和25（1950）年、愛農会。最終頁の著者紹介略歴。
- (8) 小谷純一談『イエスの僕会発足のころ』イエスの僕資料編集委員会『みちびき（第一集）』青山学院講習会 昭和56年
- (9) 「農民道場」昭和9（1934）年農林省は農村における経済厚生運動の中堅人物を養成するために全国12カ所に農民道場の設置を計画した。中国地方では山口県牟礼字坂本の地が選ばれた。現在では山口県立農業大学校となっている。小谷が具体的にどの農民道場の創設に関わったのか今のところ不明である。乞御教授。
- (10) 『愛農会創立50周年記念誌』全国愛農会、1996、14頁
- (11) 『愛農救国の書』32頁
- (12) 『愛農会創立40周年記念誌』全国愛農会1987年、16～17頁
- (13) 『愛農会創立50周年記念誌 大感謝 大歓喜 大希望』全国愛農会1995 13～17頁の小谷の文章
- (14) 『愛農救国の書』33頁
- (15) 『愛農救国の書』20頁
- (16) 『愛農救国の書』21頁
- (17) M・エンデ『エンデの遺言―根源からお金を問うこと』講談社、2011年
2013年、愛農会の有志を中心として「地域通貨にこ」の会が結成され、活動を続けている。
- (18) 矢谷慈國『賢治とエンデ』第3章
- (19) 「公益社団法人全国愛農会」の説明・「愛農会綱領（5条）」、百姓は自立する、生命を守りはぐくむ、金にしばられない、大地の恵みに生きる、世界をつなぐ心となるという5つのテーマとそのイメージ写真、「愛農会の活動」
 - ◎土といのちを守る担い手を養成します
 - ・各種農業講座……毎年春と夏に泊まり込みの農業集中講座を開講するほか、プロの農家の指導を受けながら割り当てられたほ場を管理する実践コースなどを行っています。
 - ・愛農高校の創設と支援活動……有機農業を教え、農の担い手を育てる全国で唯一の私立の全寮制農業高校、愛農学園農業高等学校を1963年に設立し支援しています。
 - ◎有機農産物の流通を促進します
 - ・有機食品の検査認証……JAS法に基づく登録認定機関として有機農産物、加工食品の認定を行いません。
 - ◎世界の農民と連帯し、農を通じて足元から世界平和を築きます
 - ・韓国の有機農業団体「正農会」との交流研修
 - ・インドの有機農業プロジェクトの支援
 - ・持続可能な農とアジア農村の発展を目指す「アジア農民の会（AFA）」への参加
 - ◎有機農業の普及・啓発のため、農業経営技術の研究会・各種セミナーを開催しています
 - ◎月刊機関誌『愛農』を発行しています

入会・購読のおすすめ

<愛農会員>

個人会員／年会費：15,000円（愛農誌1部送付）

家族会員／年会費：25,000円（愛農誌2部送付）

団体会員／年会費：25,000円（愛農誌2部送付）

<賛助員> 団体・個人を問わず加入可

年額1口／10,000円

（1口につき愛農誌を1部送付）

<愛農誌購読>

年間購読料：6,400円（送料含）

(2部以上の購読の場合、割引があります。)

■お申し込み・お問い合わせ

〒518-0221 三重県伊賀市別府690-1

公益社団法人全国愛農会

Tel.0595-52-0108 Fax.52-0109

■Eメール honbu@ainou.or.jp

■ホームページ <http://www.ainou.or.jp/>

▽郵便振替：00980-7-120442 公益社団法人全国愛農会

▽ゆうちょ銀行総合口座：記号12260 番号27260021

公益社団法人全国愛農会

▽百五銀行青山支店：(普) 4237 公益社団法人全国愛農会

▽伊賀南部農協青山支店：(普) 9030001

シャ) ゼンコクアイノウカイホンブ

(20) インターネット google「天地の化育」の書き下し文と現代語訳**biglobe**より。